

SHINGON HORONIC

# 色 は 勾 へ ど

IRO

WA

NIO

E

DO

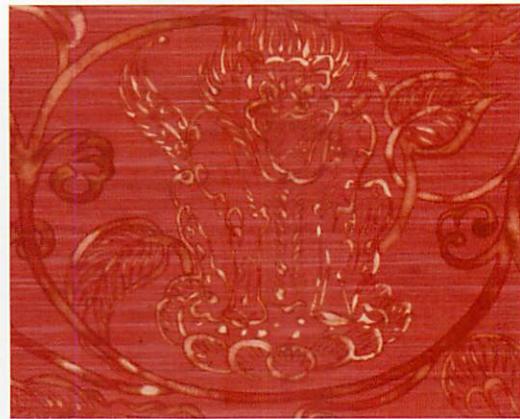


特集

長谷の観音さま

平成十四年文月吉祥日発行 卷二十四

# 獅子吼



耳障りの良い上辺だけの

空虚な言葉が溢れている

獅子の一声は威厳に満ち

一声だけで聞く者的心に響く

釈尊の説法を獅子吼という

獅子の一声以上に威厳に満ち

聞く者的心に豊かな響きをひろげる

# 特集

## 長谷の観音さま



3

## 13 現代の道しるべ

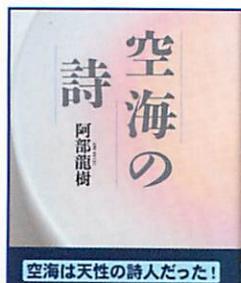


11

## お釈迦さまの真理の花束

情報コーナー

17

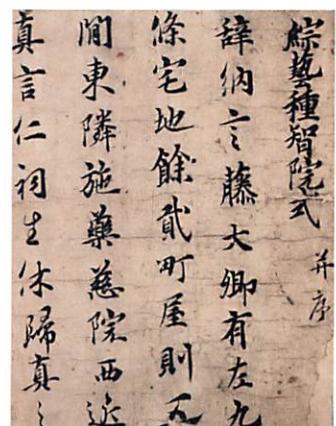


空海は天性の詩人だった！



9

『弘法大師墨蹟聚集』の会報から  
空海・日本で最初の教育論



## 弘法大師の芸術論 十三

精神文化史 研究家 西宮 紘

15



あなた生きるためにどうぞ  
詩は折り  
愛の書き  
懐かしいお話をしたじの人生  
書き残しておきたい詩、物語、詩句の叢書





高さ十メートルを超える日本最大の木造仏

右手には錫杖を持ち 左手には蓮の瓶を持つ

右手には錫杖を持ち 左手には蓮の瓶を持つ

『靈験あらたかな仏の中の仏で、その名声は遠く唐土まで聞こえてい  
る』と源氏物語にも登場する靈験あらたかな長谷の観音さま

## はなのみてら

今『はなのみてら』長谷はこもくりの初瀬と呼ばれ古来から聖地でした。同時に渓谷、瀬のはつる最果ての地。そこから初瀬の名がでました。長い谷間を行き着くことで長谷とも書くようになりました。

伊勢神宮の最初の斎宮大來皇女は伊勢に上がる前にこの地で一年半の間精進潔斎して身を清めました。

長谷寺の開創は古く天武天皇の御代（868）に道明上人によって開かれました。西の丘にお堂が建立され、その後弟子徳道上人が初瀬川のほとりで得た大木で十一観音を造顯し東の丘に十一面觀音を安置するお堂を建立されました。

堂塔伽藍がととのつた年（747）にはインド僧菩提上人や行基菩薩も参列され盛大な法要が営まれました。

ではなぜこの長谷寺が『はなのみてら』とよばれるようになったのでしょうか。



山に抱かれた長谷寺本堂

唐の国に一人の皇帝妃がいました。性格は穏和でしたが、顔が長く鼻は馬のようで人から馬頭夫人（めづぶにん）と陰口をいわれています。

なんとか美しくなりたいとう彼女の望みは何をしてもかなえられませんでした。

ありとあらゆる薬を試し、祈りを神々に捧げました。しかしまつたく効果ありませんでした。

あるとき仙人が現れ、「大和の国の長谷觀音に祈りなさい。」といつて消えました。

妃は毎日祈り続けました。祈り続けるについに彼女は世にも希な美しい姿になっていました。妃はお礼に使者をたて十余種の宝物と牡丹の苗を献木しました。江戸時代には牡丹の幹が長谷寺の屋根まで達し色とりどりの花をつけ「長谷の牡丹は屋根に咲く」と話題になりました。今境内には百五十種数千株の牡丹が咲き誇り人々の眼を楽しませています。



## 長谷觀音とわらしへ長者

むかし心の優しい若者がいました。よく働きましがいつも貧乏でした。

そこで觀音様のお堂に二十一日間こもつてお祈りをしました。満願の早朝「はじめにつかんだものを大切に」というお告げをいただきました。長い石段をおりて門のところで転んだ若者が思わずつかんだのは、一本の藁でした。

このわらが蜜柑になり絹になり馬にかわりやがてお屋敷になり、貧乏だった若者がわらしへ長者と呼ばれる物語はとても有名です。

長谷の觀音様のお徳はこうした物語の中にも語られ、日本中から大きな信仰を集めていきました。



満開の桜の中で

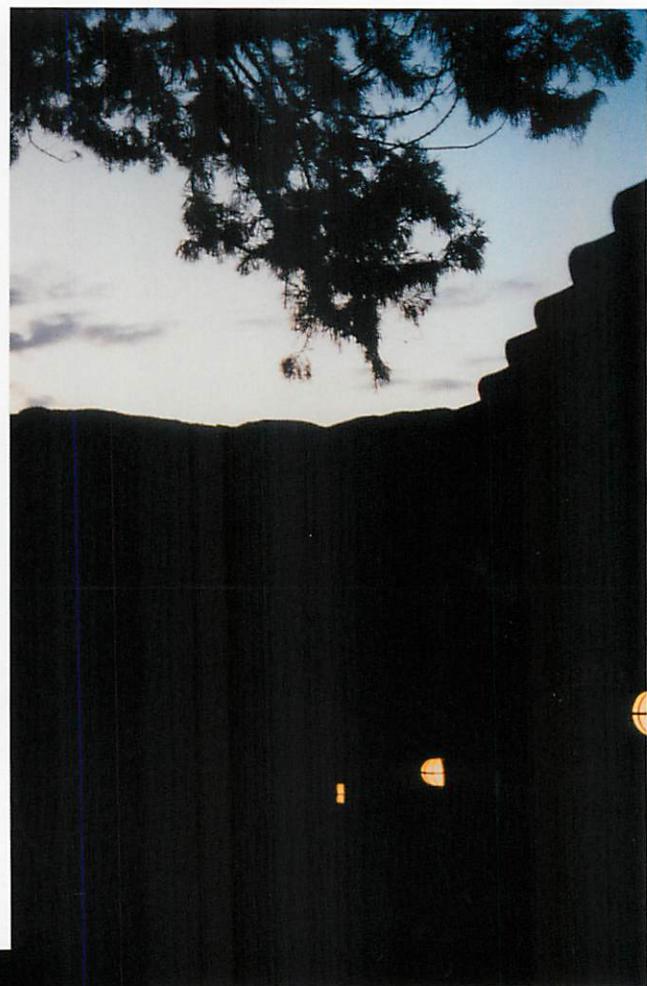
## 登廊と長谷型灯籠

長谷寺にお参りすると観音さまのありがたさや牡丹の美しさには格別です。

もう一つ長谷寺の大きな特徴は長い百八間の登廊でしょう。

後朱雀天皇の御代（1039）春日大社の社司中臣信清が我が子の病氣平癒のために寄進したのが最初です。

長谷の地に夕闇が迫るころ気品溢れる長谷型灯籠に火がともるその美しさも格別。





高さ16メートルの大観音様。木造のご本尊が火災に遭ったときに同じ大きさで描かれたもの。竹紙に描かれ紙背には寄進者16000名の名前が記されている。

并序

綜藝種智院式

辭納主藤大卿有左丸  
條宅地餘貳町屋則五  
間東隣施藥慈院西迄  
真言仁祠主休歸真も

『綜藝種智院式并序』の「綜藝種智院」とは天長五年（八二八）に空海が設立した学校名、「式」とはその基本方針のことである。我が国最古の学校教育論である。空海の真蹟は現存していないが、その写本は永く高野山無量光院に伝わり、何時の頃にかそれが米沢の上杉家により上杉神社に奉納されて今日に至っている（重要文化財）。

わが国の教育制度をみると、奈良時代からすでに都には大学、地方には国学が建てられているが、この頃の大学、国学はいずれも官吏養成のための教育であつて、一定の入学資格が階級的に決められていた。従つて一般庶民の子弟には閉ざされた制度であった。ただこのような状況の中につても、すでに二度に亘つて唐に学んだ吉備真備は儒教、道教を学ぶための二教院を開校し、また石上宅嗣はその私邸を開放し、図書館としての機能を備えた芸亭を始めているが、理解と協力が得られぬまま短期に消滅したと、空海はこの「序」の中で述べている。やがて延暦三年（七八四）奈良の都が終りをつけ、長岡京に遷都された頃、空海は都にのぼり叔父阿刀大足について学問の指導を受ける。同十年（七九一）十八歳のとき大学に進み、官僚の登竜門であつた明經科に学んでいる。しかし儒教中心の教育内容に満たされぬものがあつたのか「式」の中で空海は「世俗の学問だけが学問

だと思つてゐる。折角儒・道・佛の書物があり、その深い考究がありながら、夫々が専門だけにこもつて、丁度パイプに泥がつまつてゐるようだ。お互の交流がみられない」と述べてゐる。英才をもつてなる空海にとって、門閥によつて占められた制度や、教育の在り方に不満をいだいたのである。たまたま一沙門になり虚空藏求聞持法を受けられ、これを転機として大学を去り、靈地を遍歴して佛道修行にはげむ。この貴重な宗教体験をもつた空海は、延暦十六年（七九七）二十四歳の時、儒・道・佛の三教を思想の優劣を、戯曲風に展開した『聾瞽指帰』（高野山金剛峯寺蔵・国宝）を書いて、佛道を歩む決意を宣言する。その中で空海は「雪虫を猶怠れるにとりひしき、縄錐の勤めざるに怒る」と、即ち古人が雪の明りや、虫を集めたその光で読書をし、また天から縄をたらして首に巻き、眠くて頭が下ると首がしまつて目が覚め、更に錐を太ももに差しては勉強したと言われ、自分もそれに劣らぬ努力をしてゐるが、未だ努力が足りないと、その猛勉強ぶりを記述している。

やがて延暦二十三年（八〇四）留学生として唐に渡り、長安の学校事情を見聞するにつけ、さすがに世界最高の文化都市だけあって、坊ごとに幼い子供を指導する施設が調い、また県毎に郷学が開かれている。そのため才能豊かな人は京中に満ち、文芸に秀れた人々が國中にあふれ

てゐる。ところが新しく造営されたわが平安京には一大学があるので、幼い者の学ぶ施設が一つもない歎かざるを得なかつた。

このような自らの体験を通じて広く人材を育成する為に、身分や貧富に関係なく、学問を好む者はその機会を均等に与えてやりたいとの願いをもつて教育の原理を追求していく。幸いにもこれに共感された元中納言藤原三守は、その広大な屋敷を無条件で空海に提供して下さり、漸く長年の思いが現実のものとなつた歎びを感謝を込めて記述している。

さて学校教育には四つの条件が必要である。

まず第一は環境が良いこと。これは自然環境だけではなく、特に人的環境の重要性について論語を引用し「人間関係の豊かな環境に住むことが最善である。自ら進んでそのような環境に住まなくして、どうして優れた智恵を得ることが出来ようか」と。

第二はあらゆる学問を総合的に教育すること。

例えれば一つの味で美味しい料理を作つたり、一音だけで妙なる音楽を奏でることが出来ないので同じように、広く賢人・聖人といわれる人々は、多くの思想・哲学を学んだことにによって、片寄ることのない智恵を得た。儒・道・佛の三教はあたかも太陽や月・星が暗いところを明るく照らしてくれる

第四の条件は教師と学童の生活の安定を計ること。すなわち完全給食であると共に、教える者教えられる者、或は僧俗に關係なく安心して学問に打ち込めるよう、それに必要な給費を支給する。そのためには一人でも多くの理解と援助が必要である。大乗の教えでは人それぞれに自己を高める努力と他者への奉仕が説かれている。みんなでこの大乗の道を進もうと呼びかけ

「物の興廃は必ず人に由る。  
人の昇沈は定んで道に在り」

との信念をもつて教育の理想を追求するだけでなく、卒先垂範、和願愛語をもつて自らも学童の指導に当られたのである。

よう、道に迷つてゐる者を正しく導き、より高い道を求める人々にはその理想を究めさせてくれるであろう。

そのためには第三の条件として、多くの立派な先生を得ることである。先生には一般

教育の先生と宗教教育の指導者とが必要で

あるが、両者が別々に勝手な指導をするのではなく、両者一体となつて指導して欲し

お釈迦さまの真理の花束



As upon a heap of rubbish thrown on the highway,  
a sweet-smelling and charming lotus there may grow.  
Even so, amongst the rubbish of beings, a disciple  
of the Fully Enlightened One outshines in wisdom,  
blind worldlings.

如作田溝

近干大道

中生蓮華

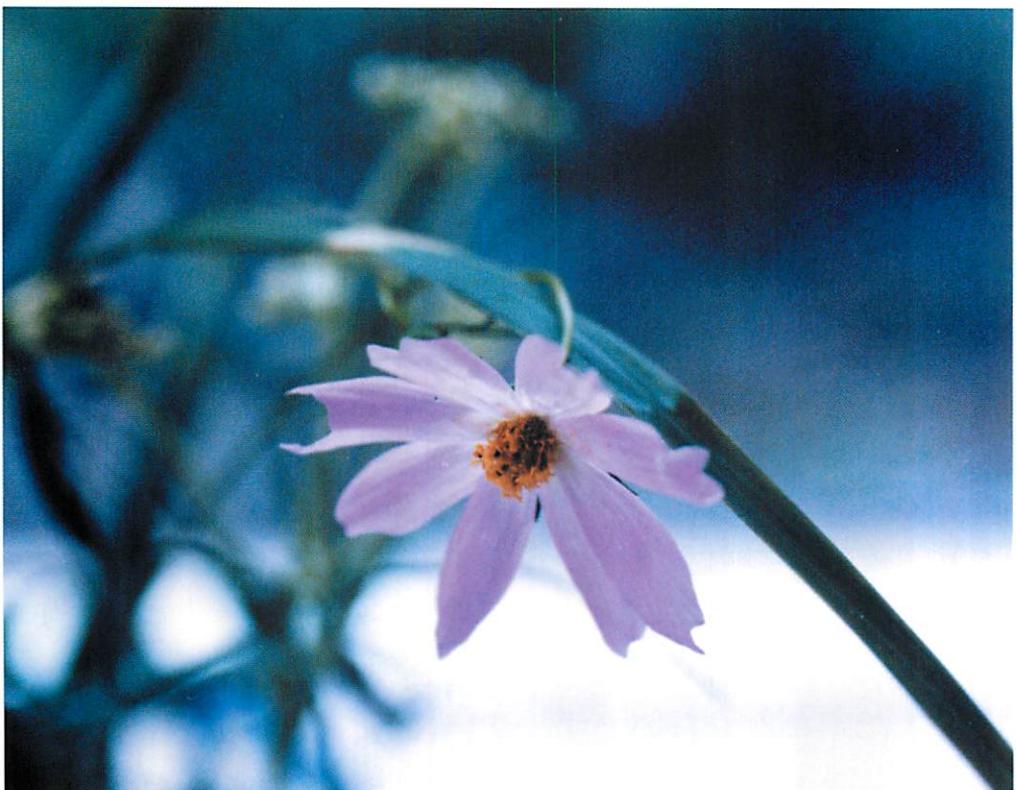
香潔可意

有生死然

凡夫處遍

慧者樂出

為佛弟子



都大路に棄てられし  
塵芥の堆の中にも  
げに薰りたかく  
こころ楽しき  
白蓮は生ぜん

かくのごとき  
塵芥にも似たる  
盲目たる凡夫のうちに  
正しき覚者の弟子は  
智慧もて  
光りあらわる



「空海の詩」の表紙を飾った向山喜章氏の  
melou touch mix  
ワックスの中に光を封じ込めるミニマルアート

今回の台風六号は素晴らしいものを届けてくれました。上梓された『空海の詩』。出版社があの良質な本のみを手がける春秋社です。読み始めることを待ちきれずに、その夜の会食も早めに切り上げたしだいです。ありがとうございます。

空海を少しでも学ぶや否や、その成し遂げた事柄の質の高さと量、多岐にわたる分野と達成するスピードの速さに、ただただ圧倒されます。人間の領域を超越しています。「本当に実存したの？宗教上の理由で、架空の英雄を創りあげたのでは？」と疑いを抱きたくなるくらいです。幸いにも、大師の著作が現代語訳された「弘法大師空海全集」あり、一昨年出版された大師の墨蹟聚集が大師に身近に触れることを可能してくれました。が、

「詩」こそが一番その作者を感じる方法かと考えるのですが、蒙昧な小生には空海の詩が全く理解できない。忘れてはいけない。

「棄てる神あれば、拾う神あり」である。やく15年ほど前に等々力の満願寺を訪れた際に、主監自ら「曼荼羅」や「不二」について分かり易くご説明下さった。そしてこの度は「詩」です。二度、拝読させていただきました。目から入る文字には理解を増しました。でも、心ではまだまだです。正に、空海は光のスピードで、小生はノミの一歩です。なぜか読み終わった後で、身の内に温かいものを感じました。珠玉の一冊感謝です。 F.T

## 21世紀は宗教と芸術アートの世紀

6月17日の夕刻。お茶会で広尾の羽澤ガーデンにやってきた。高校三年生の時の同級生でお寺の住職をしているA君は「気楽な仲間内のお茶会なので、作法等気にする必要ないし、準備することも特ないよ。」というので、当日まで気楽に考えていた。ご招待のお客様は主にA君が所属しているK女史主催のお茶・謡・書道等の日本の文化を学ぶ会のメンバーの方々とA君及びもう一人の主人の個人的な知人の集まりとのこと。会のメンバーの方々はお互いに顔見知りと見えて楽しそうに談笑している。その後A君が「空海の詩」という本を出版することになったそうで、その出版社の御担当のU氏とその奥様。A君の世田谷のお寺の講堂の照明を手がけた照明アーティストのT氏、「空海の詩」の本の表表紙のデザインをされたデザイナーのM氏を紹介された。このメンバーが一緒にお茶を頂くそうである。

日本文化の会を主催するK女史はさすがになれたもので、茶室に入って床の間の掛け軸、花瓶、それにお茶の道具を見て、いろいろ感想を述べ、



気取らず、形式ばらず、かといって身のこなしは優雅に席についた。続いて先輩のN氏。話ではお茶会は初めてとのことであったが、いやいや道に行っていて、立派なものである。その後A君が入ってきてお茶を始めた。



A君がお茶をたて、K女史が飲んだ。この作業を永遠7回行うのかと思ったら気が遠くなった。ところが、K女史はほんの少し飲んだ

だけで2番目のN氏に回した。テレビや映画で見る様に、一人一杯ずつ飲むのではなく、一杯のお茶を回し飲みするようだ。「ああ 良かった。これで時間が相当短縮される。」私の番になった。抹茶の粉がどろどろになった凄く濃いお茶である。私は緑茶は大好きなので、この濃いお茶も非常に気に入った。「この濃いお茶はなんというんですか?」と質問すると「その名の通り「お濃茶」ですよ。」とK女史に教えてもらった。なんか素直な命名で気に入った。自分の番が終わったところで失礼して足を崩させてもらった。他の人もそれに合わせ足を崩し、やっと生きた心地がして、少し寛ぐことができた。

お茶会が終わり、間照明アーティストのT氏といろいろ話したが、彼はスミソニアン博物館・ニューヨーク近代美術館・セントルイス美術館などの照明を手がけた著名人で、PRADAの全世界の店舗の照明や正倉院の照明等も手がけているとのこと。A君のお寺の講堂の照明を見たことがあるが、LEDを使った1/fゆらぎを取り入れた照明は見事であった。光ファイバーの技術で旭硝子と共同特許を持っているそうで技術と芸術の両方の才能を兼ね備えた非常に魅力のある人物であった。どうも私の仕事の運用の世界も技術とARTと両方の才能が必要ではないのかという仮説で意見が一致した。(U氏の茶会記より抜粋転載)



世田谷長圓寺光曼荼羅

有一味作羨膳片音  
妙曲者々立身々要

「心境冥会」はお大師様独特的静慮ないしは禪定がベースにあつたことがわかつたのであるが、別の視点からもこれに接近してみよう。能楽で用いる能管（七孔の横笛）の場合、その発する音をオシログラフに波形として映し出してみると、不思議なことに我々が聞くことのできる周波数の音のほかに、我々が聞くことができない種々の周波数の音を伴つていて、それが知られている。つまり、能管は聞こえる音以外にさまざまな聞こえない音を同時に発しているのである。こういう聞こえない音はノイズと共に、CDなどデジタル化の過程で失われているのである。これは西洋の和声法における口ゴス的な発想に基づく純粋に聞こえる音のハーモニーを目指すという思想性に支えられている。しかしながら、昔の人々は、この聞こえる音はまさにこの世のもので、聞こえない音は神祕ないしは冥界にかかわるものとして確實に認識していた。役行者が大峯山中で「蘇莫者」という曲を笛で吹いていたら、山神が出現してそれに合わせて舞つた（『教訓抄』）などと、数多くの伝説がそのことを物語つてゐる。聞こえない音は、山神、鬼

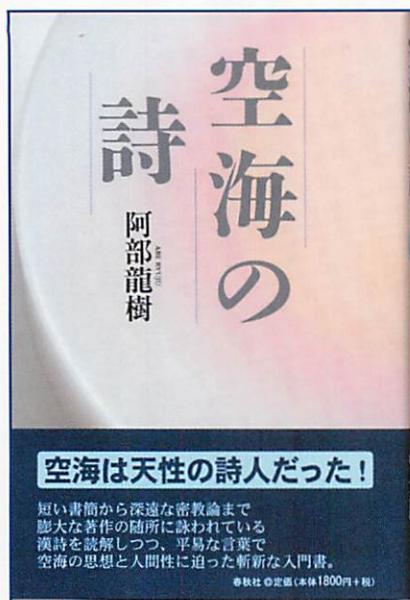
神、使者、仏などと大きくかかわつてゐたのである。どういう音が優れた音で、どういう音がいわゆる音になつていないのである。おそらく重要なことは、聞こえない音が我々の無意識を発動……しかも深く底に秘められた無意識の発動をも促す場合であろう。聞こえない音を聞くといふことは、単に聴覚だけでは不可能であつて、いわば体全体で聞く、無意識レベルではじめて把握できるものではないだろうか。換言すれば、我々の無意識を発動させるような聞こえない音を伴つた音こそが、優れた音であると言えるのではないか。そうあればこそ笛の名手は、己の吹く笛の音に耳をそばだて、己の耳に聞こえる音に對峙していると同時に聞こえない音に向かい、聞こえない音をひきつけ、聞こえない音と一体化し、その一体化の境地を持続する。このとき己の無意識が発動して体全体から発する音となる。これこそ名手の笛の音であると言える。これではないだろうか。ここにおいて、「向かい」「ひきつけ」「一体化し」「その境地を持續する」というのは、それらの資質という点のみならず大変な修行が必要であろう。ましてやその対象が聞こ

える音のみならず、それに伴う聞こえない音こそが対象となるからである。そしてまさにこの、「向かい」「ひきつけ」「一体化し」「その境地を持続する」ということこそ、静慮の特徴を示すものなのである。静慮のこうした諸相は、真言密教では三摩地法と総称されているようだ。三摩地とはsamadhi の漢音訳であり、お大師様は等持と訳されている、対象と自己とを平等に至らしめることである。しかし、この三摩地法を修するには、まず呼吸法を学ばねばならない。その呼吸法は基本的に出息、止息、入息、保息の四つの要素から成り立つてゐる。しかし、この四つの要素はこの順序にしたがつて「向かい」「ひきつけ」「一体化し」「その境地を持続する」ということに對応しているのである。つまり、この呼吸法はすでにこの呼吸法の中に秘められていると言えるのである。かつてリルケは薔薇と自己との一体化を存 在を交換する世界内在的空間という種の波動空間として把握したが、これはまさに呼吸によつて支えられていたのである。

# 『空海の詩』

阿部龍樹著

春秋社



「空海は天性の詩人だった」で始まる本書は、読み進むほどに驚きの連続だった。何冊かの入門書を読み、その思想と生涯を知るにつれ、空海はわれわれ凡人とは隔絶した万能の天才なのだと想い、敬して遠ざけていた。

漢詩にしても、空海のことだから、さぞや才長けた、どこから見ても非の打ち所のない作品を詠んでいるのだろうと予想していた。しかし自分にはその高い境地は理解できないだろうと。

最初の「後夜に仏法僧鳥を聞く」の詩を読んで、いきなり衝撃を受けた。これはまさしく禪で言う悟り体験を詠つた詩ではないか。

早朝の静かで美しい自然描写から、何の構えもなく詩の世界に解け込んでいた。言葉ではなく空海のその時的心境を自らの実感としてとらえきった現代語訳と解説は、この上ない共感をともなわせて、読者を空海の世界に誘ってくれる。

きっと本書の著者は、長年にわたって何度も何度も、折に触れ空海の漢詩を読み返してきたのだろう。

読了した時、空海の生き方、考えの核心のようなものに触れている自分に気づいた。本当の意味で空海に入門でききたと実感した。  
(上田鉄也記)

【樋口可南子のきものまわり】

清野恵里子著

集英社

「日本佛教曼荼羅」

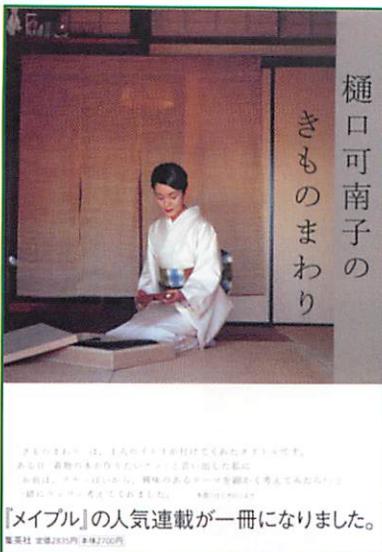
ベルナール・フランク著

藤原書店

『詩のささげもの』

宗左近著

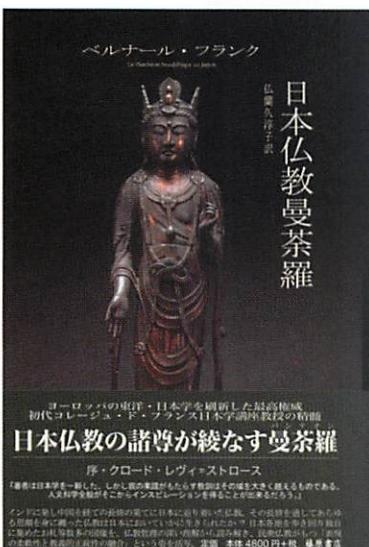
新潮社



最近周りで着物を着る人が増えてきた。女性だけではなく男性でも。

それも着物を特別な時に着るというのではなく、さらりと普段に着る人が。

本書は女優樋口可南子さんが案内役となって、きものを通した人や物、お店との出会いをまとめたもの。



著者は初代コレージュドフランス日本学講座教授。碩学博識にしてインド中国日本の仏教に精通している。本書は正に仏教の曼荼羅パンテオン。とくに第三章はインド仏教から真言密教までの仏教の大河を一望できる好著。現代最高の哲学者レビ・ストロースの序文もいい。



人はいつから詩を詠い編むようになつたのか。詩人宗左近が詩の魅力を伝え、詩の神様にささげものとして著した本書を通してあらためて、詩の魅力や詩が与えてくれる生きる力を再発見できる。



次回発行は 12月1日予定  
特集 黒木靖夫が語る 21世紀のデザイン

Editor ABE RYUJU Art Director and Photographer/SHU FUJIWARA

Editorial Staff/ SAMURO MIWA TOKUMARU KOJI MOTOYAMA KAZUFUMI OYAMA CHIGUSA SIMAZU RYUTOKU KAWASAKI YUKIKO

Homepage Design MASAAKI OKA HIROYUKI HANAWA Making Mechanic SANMITUSHA+BENRIDO Printing KORINKAKU

EDITORIAL OFFICE MANGANJI SHUGEISHUCHIIN S.H.C

〒158 東京都世田谷区等々力3-15-1 電話 03-3705-1622 フaxシミリ 03-3703-4979

Shingon Horonic Irowanioedo 第一卷第二十四号 平成十四年長月 一日發行